

社会福祉法人京都社会事業財団
西陣病院
http://www.nisijin.net/

多科・多職種が緊密に連携し 患者さんをトータルマネジメント

京都市西北部において透析医療の中核を担う西陣病院(京都府京都市、一般病床320床)の透析センターは、2008年8月、患者数の増加への対応と効率化を図るため全面リニューアルしました。各診療科・多職種の密な連携で、種々の合併症を抱える透析患者さんを支えます。

処置室
リニューアル時に新設された、寝たきりで透析センターへの搬送が困難な入院患者さんの透析を行う処置室。常設のベッドはなく、コンソール8台が設置されている。同じフロアにある病室からベッドごと搬送して透析を実施。入院患者さんの透析を担当する臨床工学技士には、臨床検査技師や看護師のダブルライセンス取得者がおり、迅速に対応できる環境を整えている。



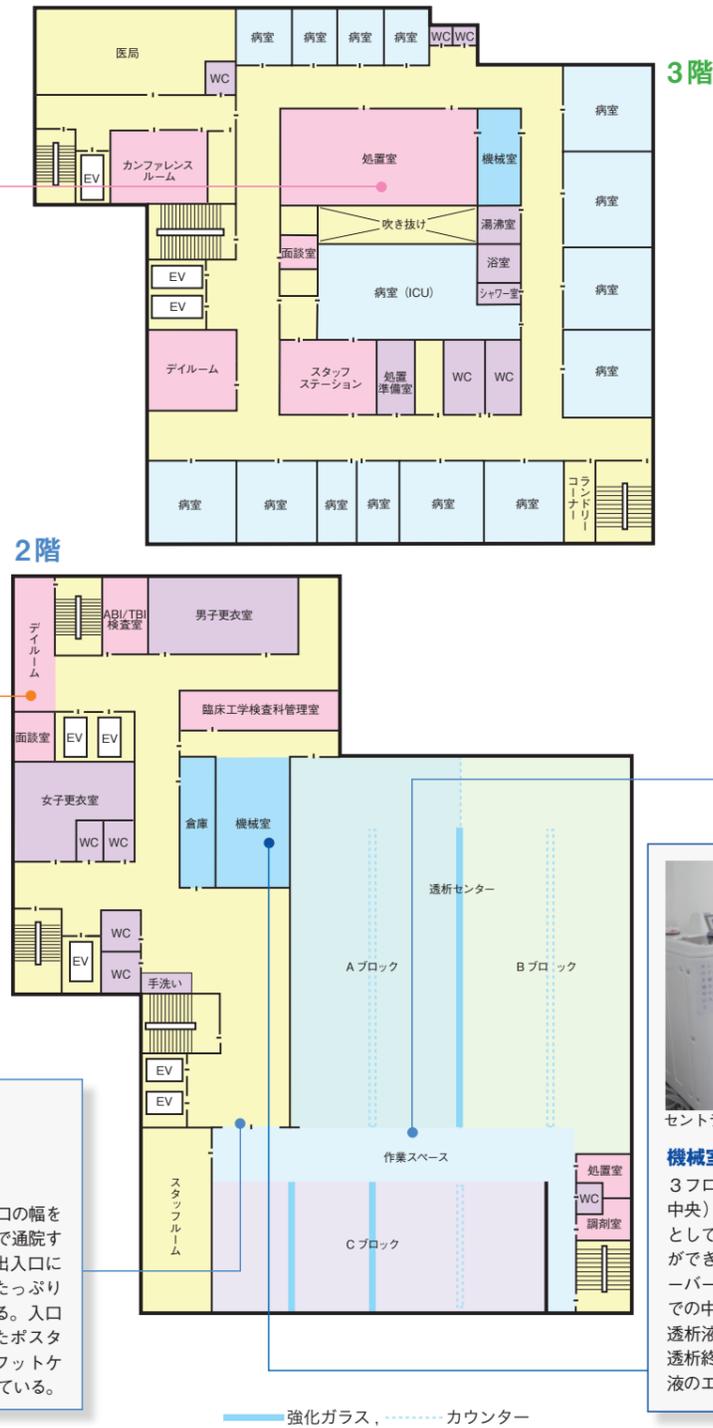
リフトスケール
処置室で透析を実施する寝たきりの患者さんの体重計測に使用。シートマットを患者さんの体の下に敷き、リフトに金具を接続するだけで自動的に体重計測ができるため、移動に伴う患者さんやスタッフの負担軽減につながっている。病院の改築に伴い病室のベッドを低床のものに切り替えたため、これまで使用していたリフトスケールを独自に改造した。



ダイルーム
リニューアル時に新たに設けられた。大きな窓からはたっぷりの日差しが入る。透析終了後には多くの患者さんが食事や談笑の場として利用している。



透析センター入口
リニューアル前に比べ、入口の幅を2倍の広さにした。車イスで通院する患者さんも多いため、出入口には車イスが置けるようにたっぷりスペースが取られている。入口横には、委員会で作成したポスターを掲示し、感染防止やフットケアなどの患者教育に利用している。



透析センター

中央に配置した作業スペースからは、放射状に広がり、ほとんど壁がないワンフロアの透析センター全体を見渡すことができる。A、B、Cと3ブロックに分かれており、主にAは重症患者さんと導入期、B、Cは維持期の透析を実施。ブロックごとに時間をずらして透析を開始することで業務の効率化を図っている。また、透析終了時刻が遅くなると帰宅に不安があるという高齢患者さんが増加したため、Cブロックのスケジュールを調整し、午後の透析開始時間を早めている。



セントラル装置は4台備える



3台設置されている水処理装置



トキシノメーター(左)と生菌数試験システム「ミリフレックスシステム」(右)

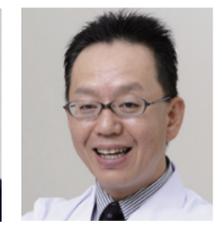
機械室
3フロアに分かれていた機械室も1か所に集約された。水処理装置(写真中央)は、1台が故障しても、ほかの2台でカバーできるため、災害対策としても期待できる。また、3台を比較しながら異常の有無など一括管理ができることも大きなメリットである。運転時間に合わせて透析装置のオーバーホール時期を決めており、2年前からは、次回のオーバーホールまでの中間期に透析装置の機能点検を定期実施するなど安全管理面にも注力。透析液の清浄化にも力を入れており、月1回の精密検査のほかに、毎日、透析終了時にサンプルを培養して生菌数を調べ、トキシノメーターで透析液のエンドトキシン濃度を測定している(写真右)。



水野良彦
臨床工学検査科
担当副部長 兼 科長



佐伯昭子
看護部 副部長



今田直樹
泌尿器科部長・
透析センター長

**専門職が協働し
病院全体で透析患者さんを支援**

「透析センターの患者さんは、同時に西陣病院の患者さんです」と今田先生が語るように、透析センターの泌尿器科医5人と内科、外科、整形外科など計11診療科の医師が密接に連携して病院全体で透析患者さんの全身管理を行っています。緊急時には、電話1本の依頼で他科医師が透析センターのベッドサイドまで来訪し対応。また、フットケアチーム、リン・カルチームにも、他科医師や管理栄養士、薬剤師が参加し、栄養面や服薬などの指導にも専門職による全面的なバックアップ体制ができています。

08年4月には、臨床工学科と臨床検査科を統合して臨床工学検査科に改称。血液浄化部門の臨床工学技士21人中13人がダブルライセンスの臨床検査技師です。日常の血液透析を通じて患者さんと顔なじみの技師・技士が検査も担当することで、患者さんの安心につながっています。また、検査結果を迅速にフィードバックできるというメリットもあります。

「入院透析担当の3人の臨床工学技士のなかには、看護師の有資格者もいます。検査やケアも含め、患者さんを一貫して支援できる体制をつくりたい」と水野臨床工学検査科担当副部長兼科長は話します。透析患者さんを支えるチームの充実で、さらなる透析医療の向上と発展に期待が寄せられています。

**ワンフロア化で業務を効率化
個別性の高い透析医療を提供**

西陣病院は、08年、それまで透析導入期、維持期、重症の3フロアに分かれていた透析センターをワンフロアに集約し、透析ベッドも88台から115台に増床しました。さらに、病棟ベッドごと搬送して透析を行うことができる処置室(8床)を新設しました。

「保存期腎不全から終末期までをチームで対応するのが将来の目標。透析センターのワンフロア化はその第一段階です」と語る今田直樹先生。急変時には人員を集中投入できるなどの迅速な対応や業務の効率化につながりました。

「看護部では、効率化によりできた時間でカンファレンスを行い、患者さんの状態に応じた個別性の高い看護計画の立案修正にあてています。また、フットケアや生活指導の充実を図っています」と佐伯昭子看護部副部長は話します。

臨床工学検査科でも、フロアによって医療機器の使用や急変時の対応など、求められる知識や技術などの面で経験に差があったため、スタッフ間の技量のばらつき解消が課題の一つでしたが、ワンフロア化により「経験豊富なスタッフが現場で若手を教育できるようにになりました」と水野良彦臨床工学検査科担当副部長兼科長は話します。

また、災害、事故、感染対策ほか各委員会活動も、日ごろから緊密に情報を共有できるようになりました。